



表情を失った町民が「わが町」を見つめていた(3月14日 宮城県南三陸町)



「うちのばあちゃんなんです」と手を合わす男性(3月13日 宮城県仙台市)

緊急レポート

大東日本 震災

電車、大型トラック、家までが「おもちゃ」のように流され、破壊された。線路は外れ、ひん曲がる。3階建ての庁舎は屋上にまで瓦礫と波が押し寄せ、人々を呑み込んでいった。3月11日に発生した東日本大震災。人々は激しい揺れに何とか耐えようとした。しかし、その半時間後に押し寄せた超巨大津波が完膚無きまでに追い打ちをくらわせた。さらなる火災で一帯を焼き尽くされた地域も多かった。

イラクやソマリアなどの紛争地でも筆者が見ることがなかったような壊滅状況は、広範囲への徹底的な絨毯爆撃を思わせ、思わず「津波爆弾」という言葉が飛び出した。踏みしめる瓦礫の下にまだ万単位の人々がうずもれている。息絶えた多くの人々にも出あった。何度も手を合わせ、頭を垂れた。地震、津波が襲った当日夜、筆者は関西から現地へ向けて車で出発した。夜通し走り続けた翌午前、福島県沿岸に到着。車中泊しながら岩手県まで徐々に北上していった。その間、目に飛び込んできたのは、瓦礫の山々。人間が造ったすべてを、いとも簡単に「自然」が破壊し尽くしたのだ。「自然の鉄槌」は原発も見逃さなかった。人間がする「想定」などは、地球、あるいは宇宙の「営み」をはかれない。人智がまったく及ばない世界。そこに我々が、ほかのものたちとともに、生かされている。自分の生活を今日から見直し、改めることに、追悼の意も込めたい。

(写真・文 國森康弘)



かたく握った手をはなさないように(3月15日 岩手県大槌町)